

平成27・28年度 調査研究報告書

**企業やNPOなどと連携した  
体験活動に関する調査研究**

一般社団法人 埼玉県校外教育協会

# 目 次

## 挨拶

(一社) 埼玉県校外教育協会常任理事 埼玉県教育局市町村支援部家庭地域連携課長	橋 本 強 . . . . .	1
--	-----------------	---

研究概要 . . . . .		2
----------------	--	---

## 調査研究報告

(1) 自分の住む地域を見つめ直して －地域の防災マップを作ろう－	さいたま市立 尾間木小学校	… 6
(2) 安全・安心な町づくりを目指して －防犯・防災の専門家との連携による 防災マップ作りを通して－	草加市立 草加小学校	… 10
(3) 生徒が主体的に活動する、企業との連携 －「異文化交流」におけるゲストティーチャーとの 双方向的な学習活動－	新座市立 第二中学校	… 14
(4) 学ぶ意欲を高め、主体的に活動する児童の育成を目指して －科学体験を通して児童の学びを高める取組－	毛呂山町立 川角小学校	… 18
(5) 社会へ踏み出す第一歩 －職場体験活動を通して－	狭山市立 山王中学校	… 22
(6) 子供が関心を持って取り組む環境学習 －企業等との連携を生かして－	本庄市立 旭小学校	… 26
(7) “もしも”の力を育む実技講習 －専門的な知識を有する団体との連携を通して－	秩父市立 影森中学校	… 30
(8) 心と体のバリアフリー －社会福祉協議会と学校との協働学習を目指して－	加須市立 大利根東小学校	… 34
(9) 地域の職業人と連携した体験活動 －「働く」ことの意義や大切さを学ぶ－	行田市立 忍中学校	… 38

調査研究委員一覧 . . . . .		42
--------------------	--	----

# 挨拶

(一社) 埼玉県校外教育協会常任理事  
埼玉県教育局市町村支援部家庭地域連携課長  
橋 本 強

埼玉県校外教育協会では、子供たちの学校外での学習や活動の機会を充実させるという設立の趣旨を踏まえ、2年間の調査研究を行っております。平成21・22年度は「『学校ファーム』を活用した農業体験活動」を、平成23・24年度は「児童生徒が乳幼児と触れ合う体験活動」を、平成25・26年度は「郷土の伝統文化体験活動」をテーマにした調査研究に取り組み、その成果を報告書にまとめ、会員である県内小中学校等に発信してまいりました。平成27・28年度は、9小・中学校に「企業やNPOなどと連携した体験活動」をテーマとして調査研究に取り組んでいただきました。

現在、グローバル化や情報化が進行する一方で、人工知能やロボットの開発により、今後10年から20年のうちに現在ある仕事の半分がなくなると言われるなど、先を見通すことが難しい時代になってきております。

子供たちが、この変化の激しい社会を生き抜いていくためには、一人一人が学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを生活や社会の中の課題解決に生かしていくことが求められます。

そのため、学校教育に「外の風」、すなわち、変化する社会の動きを取り込み、社会と結び付いた授業等を展開することが重要になります。そのような観点からも、今回の調査研究テーマである「企業やNPOなどと連携した体験活動」に取り組むことは大変意義があると考えます。

本報告書には、企業やNPOなどの専門的な知識に触れ、生き生きと学ぶ子供たちの様子や先生方による工夫を凝らした多彩な授業など、地域や学校の特色を十分に生かした教育実践を記しております。是非、多くの方々に参考にしていただきたいと思います。

調査研究委員を務めていただいた先生方には、2年間で6回の調査研究委員会に御参加いただくのみならず、毎回、自校で実践した内容等をまとめたレポートを持ち寄って研究を深めていただきました。また、NPO法人元気プログラム作成委員会副理事長の大熊先生には、研究を進める上で数々の御指導、御意見をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

結びに、本研究を推進するために多大な御協力を賜りました関係者の皆様、とりわけ調査研究校の校長先生をはじめ教職員の皆様、さいたま市教育委員会並びに関係市町教育委員会の皆様、各教育事務所の皆様に心から感謝申し上げます、挨拶といたします。

## 企業やNPOなどと連携した体験活動に関する調査研究概要

近年、情報化やグローバル化といった社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となつてきており、全ての子供たちの生き方に影響するものとなっている。

子供たち一人一人が、予測できない変化に主体的に向き合つて関わり合い、より良い社会の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である。

そのような力を育成する手立ての一つに、企業やNPOなどとの連携が考えられる。

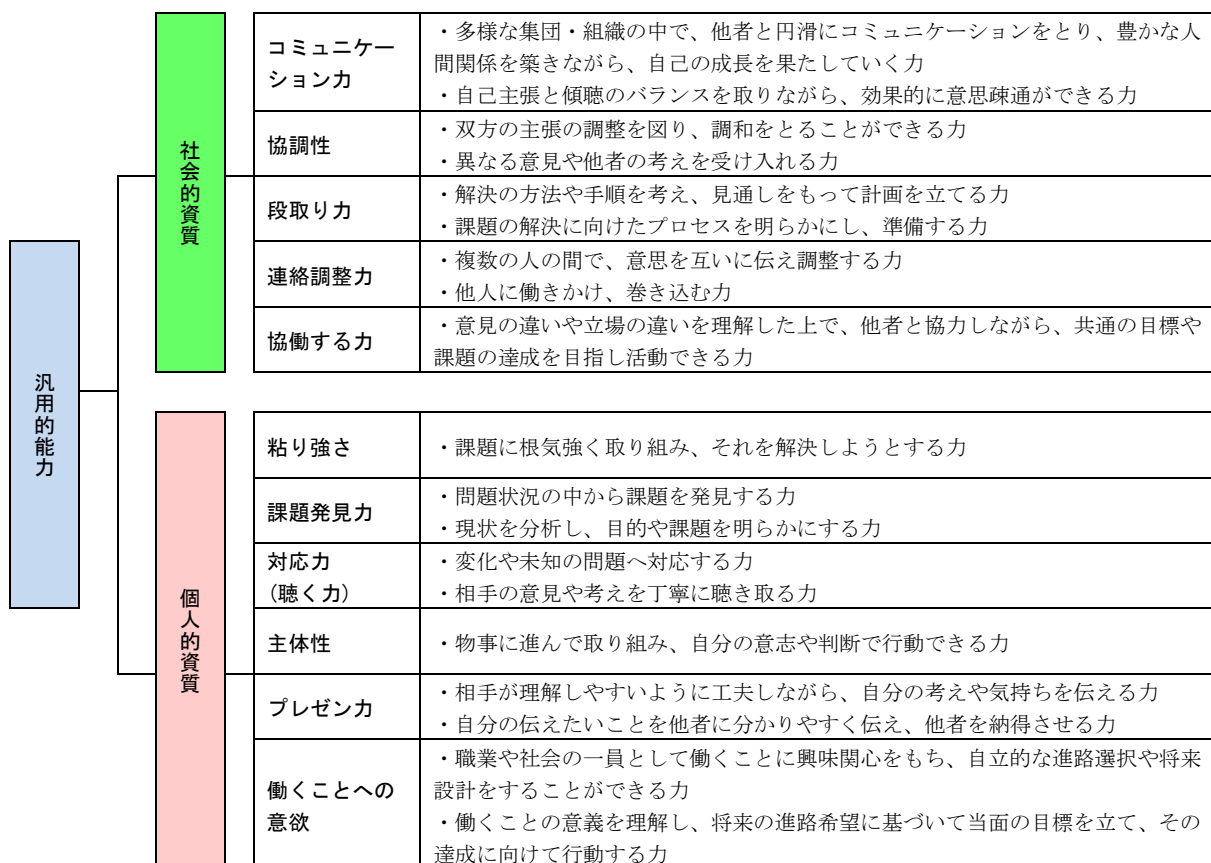
現在、埼玉県内の小・中学校においては、例えば、JAと連携した農業体験活動や地域の企業や店舗などと連携・協力した職場体験など企業やNPOなどと連携した様々な体験活動が実施されている。学校における企業やNPOなどとの連携は、学校では体験できないことを体験できたり、実際に働いている人々に触れたりすることで様々な工夫などに気づく機会となっている。さらに、子供たちが大人になったときに生きて働く力（汎用的能力）も育成することができると思う。

そこで、「ねらいの明確化」「カリキュラムデザイン」の二つの視点をもとに各校での実践を行い、成果や課題を明らかにし、新しい連携プログラムを創造するとともに、子供たちに汎用的能力を育成することを目指すこととした。

### ○ ねらいの明確化

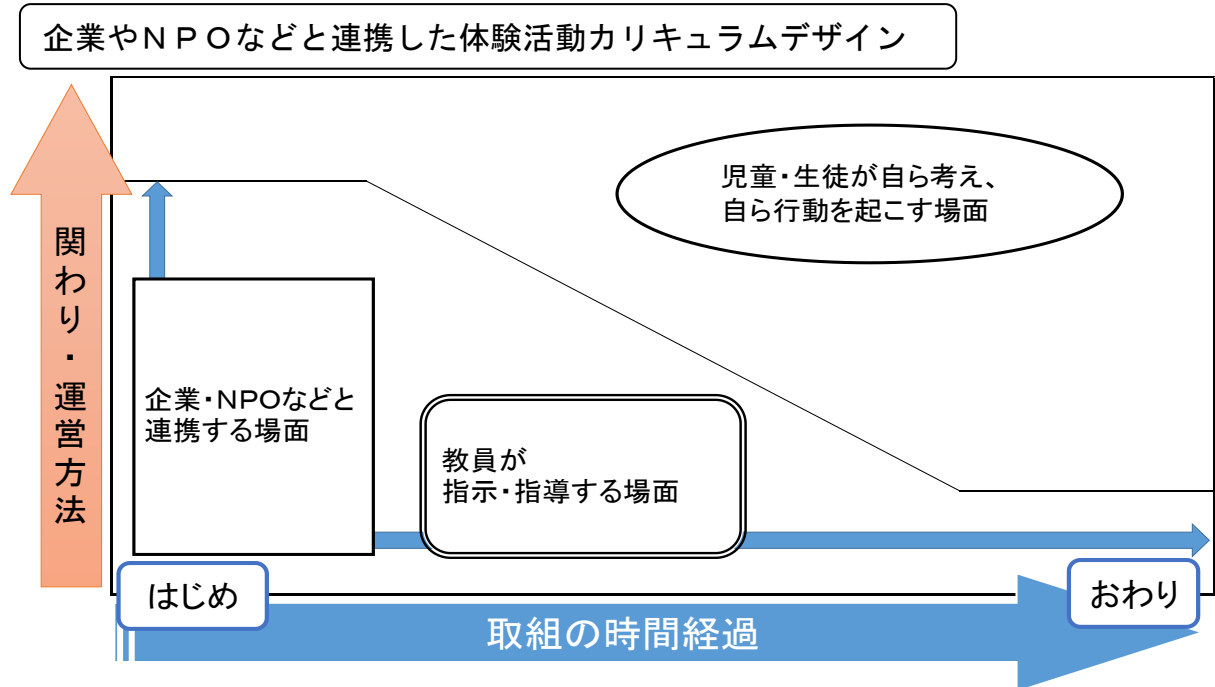
汎用的能力として、どのような力を育成することが大切なのかを、これまでの活動を分析することを通じて、明らかにした。

## 企業やNPOなどと連携した体験活動で培うことができる汎用的能力

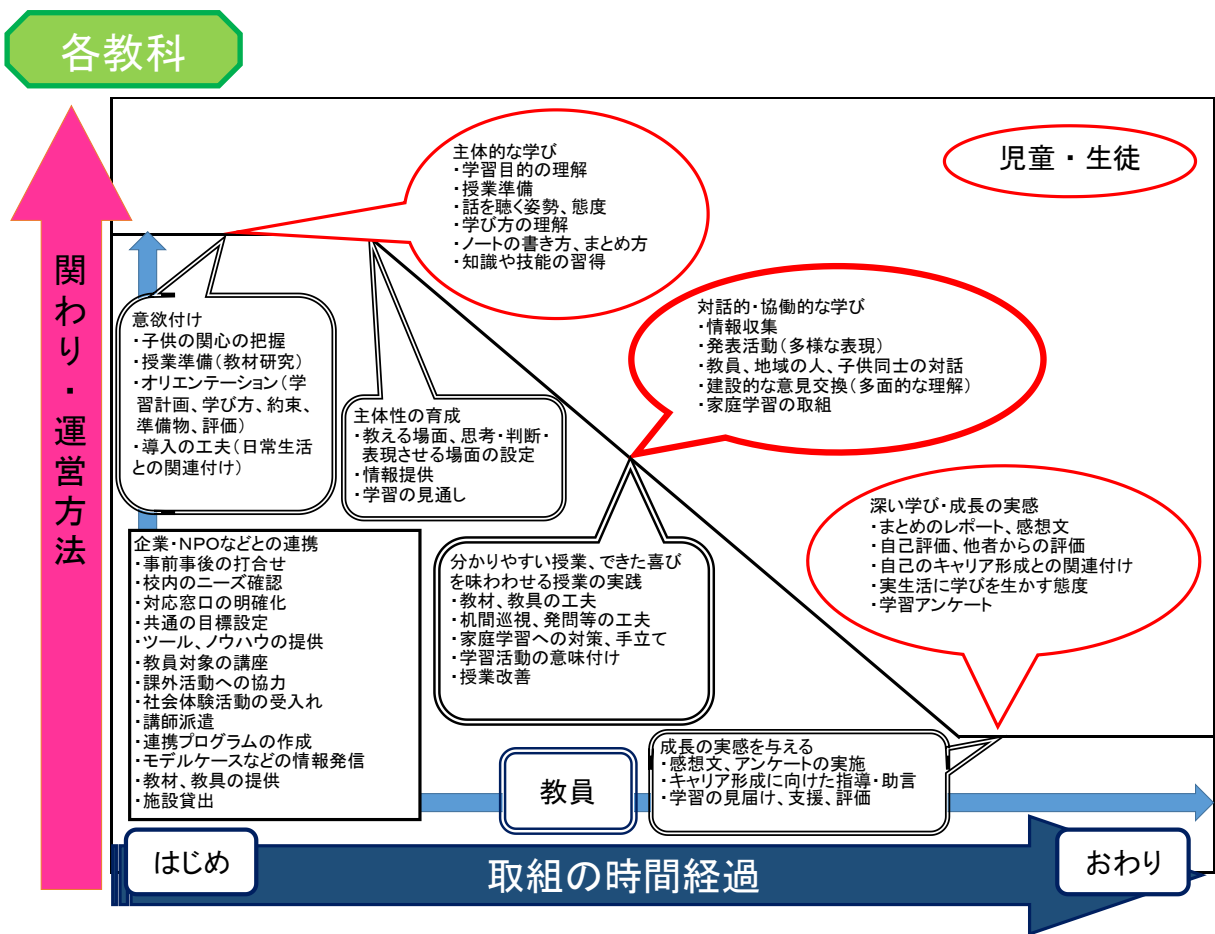


○ カリキュラムデザイン

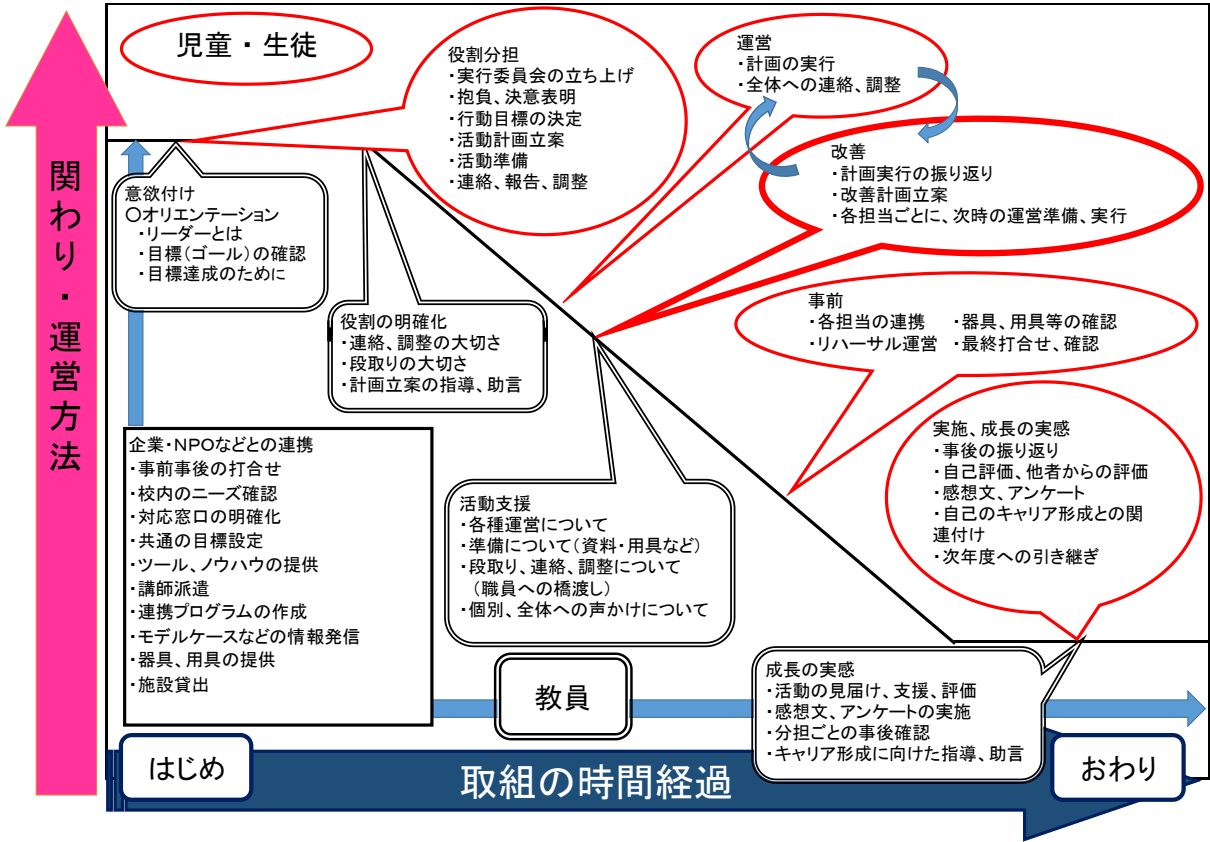
主体的に学ぶカリキュラムを例示し、それぞれの場面ごとの子供の学びと教員の指導内容等を明らかにした。



この軸を基に、各教科・行事などにおける取組をカリキュラム化していく。



# 行事



# 調査研究報告



# 自分の住む地域を見つめ直して

—地域の防災マップを作ろう—

さいたま市立尾間木小学校

## 1 学校概要、地域の特徴

本校は今年度開校145周年を迎え、地域とともに歩む歴史のある学校である。現在、30学級、児童数951名と、市内でも規模が大きい学校である。

本校では、学校教育目標に「心豊かでたくましい尾間木っ子の育成」を柱に、「進んで仲良く明るく」という児童の育成を目指し、日々教育活動を進めている。前年度までの7年間、研究委託を受け算数の研究に取り組んできた。また、今年度からは体育の研究に取り組んでいる。

校区はさいたま市の東側に位置し、地域には自然が残る公園や文化財、神社仏閣などが数多く残されている。

## 2 活動のねらい

自然災害について防災の意識を持ち、自分たちにできる備えについて考え、自分たちの生活とのかかわりを振り返ったり、身近になった災害への意識を高めたりする。また、自ら課題を見つけて調べ、友達と話し合い、自分の考えを伝え合いながら、まとめていく活動を通して、自分の考えを深めたり、実践力を高めたりすることをねらいとする。

## 3 活動の概要

### (1) 重点とした汎用的能力

- ・課題発見力：問題状況の中から課題を発見する能力
- ・コミュニケーション力：自己主張と傾聴のバランスを取りながら、効果的に意志疎通ができる力
- ・プレゼン力：相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝える力

### (2) 教育課程上の位置付けや時間数

学 年	教科等	単元・題材名等	時期・授業時間数
第5学年	総合	見つめよう！わたしたちのまち ～尾間木のまちをみなおそう～	2・3学期 35時間

※ 総合：総合的な学習の時間

### (3) 活動計画

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
1	導入	オリエンテーション			な主体的



時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
2	高校との連携	浦和学院高等学校 講師による大震災に関する話	○事前にゲストティーチャーとの打合せを行い、学習の趣旨や触れてもらいたい内容を確認する。		主体的な学び
		お礼の手紙			
2	課題	災害に関する課題	○自分の住む地域に起こりうる災害を考えるようにする。	課題発見力	
5	調べる	個人の調べ活動	○司書教諭とも連携し、災害に関連した資料を用意してもらおう。 ○災害の概要だけでなく、普段の備えや避難方法も考える。		
1	発表	中間発表会	○画用紙1枚にまとめ、発表できるようにする。		
2	企業との連携	NHK 防災マップ作りについて(地震・台風・雷など)			
2	課題	学区・地域から課題を立てる ・防災について	○地域調査 学級ごとに調査する。	課題発見力	
3		同じ課題ごとにグループ作り、計画を立てる			
			【非常食体験(給食)】		
8	対話	同じ課題ごとのグループ活動	○1回目は、教師の案内で避難所など主だった場所を回る。 ○2回目は課題ごとのグループで計画を立てて地域調査を行う。	コミュニケーション力	

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
8	まとめ・発表	発表会  NHK防災マップへの入力	○スムーズに発表会が行えるように、発表方法等を指導する。 ○学級ごとに活動し、パソコンの扱い方等を指導する。	プレゼンカ	深い学び・成長の実感
1	振り返り	振り返り 浦和学院高等学校の講師の方へお礼の手紙を書く	○今後の自分の生活につながるように、具体的な内容を示しながら振り返りを行う。		

#### 4 活動までの道のり

防災について学習していくことを児童に伝え、学習の見通しを持たせる。課題ごとにグループを分ける前に、事前指導として浦和学院高等学校から講師を招き、東日本大震災の被害の様子や人々の生活について話を伺う機会を設ける。

##### ① 浦和学院高等学校との連携

防災について学習していくことを伝え、単元の計画や学習のねらいに関連させて、どのような内容の話にするか打合せをした。実施の1週間前には、話の具体的な内容について打合せをした。

##### ② NHKとの連携

NHKに連絡し、防災マップについての資料等を送ってもらい、手続きに関して確認をした。実際に申し込む際、学習の内容・ねらいを含めて話し合い、具体的な使用方法やアドバイスをもらった。

#### 5 活動上の工夫

##### ① 課題発見力を身に付けさせるために

浦和学院高等学校の講師の話では、東日本大震災を例に出してもらい、災害の怖さや人々の生活が大きく変わってしまうことを理解させる。その中で、自分たちの住む地域では、どのような災害が起こる可能性があるのか考え課題にする。



【震災の様子の講演】

##### ② コミュニケーション力を身に付けさせるために

課題ごとにグループを作り、災害について具体的に調べたり、地域探検をして実際に見学して考えたりする。考えたことを友達と対話していくことで、自分とは異

なる視点や考えを聞くことができる。グループとしての意見を集約する過程において、互いの主張の調整を図り調和をとる協調性を育む。

#### ① プレゼンカ

調べたことを発表することだけではなく、NHKの防災マップに登録し、インターネットを通じて、全国の人々に発信する機会を設ける。



【課題ごとのグループ活動の様子】

## 6 成果と課題

### (1) 成果

- 災害への知識や関心を高めることができた。
- 地域の特色を知り、災害が起こったときの対応や判断の仕方を身に付けることができた。
- 自分たちの調べたことが、インターネット上でみんなに見られることから、学習意欲の向上につながった。

### (2) 課題

- オリエンテーションでは、東日本大震災の被害例には当地域は当てはまらなかった。実際に自分たちの住む地域で起こる災害の例を話してもらおうと、さらに学習への意欲が高まると考えた。
- 防災マップへの入力に関して、内容が重なるグループが多かったため、自分たちが調べたことを入力できないグループもあった。課題の持たせ方、グループ編成については再度検討が必要である。

## 7 NEXT PLAN

今回は浦和学院高等学校の講師の方、NHKの方々に協力を得て、防災に関する学習に取り組んできた。次回は、実際に自分たちの住む地域の防災を学習の大きなテーマとして取り組みたい。また、災害があった場合を想定した学習だけでなく、実生活につなげるため、災害への備え方についても触れていく必要がある。そのために、消防署の職員の方々等も含めて、必要な企業・機関との連携を広げていくことが考えられる。

# 安全・安心な町づくりを目指して

－防犯・防災の専門家との連携による防災マップ作りを通して－

草加市立草加小学校

## 1 学校の概要、地域の特徴

本校は、1872年(明治5年)に真言宗智山派寺院東福寺にあった協和学舎を草加学校と称し開校した。今年度、創立144周年を迎えた伝統校である。また、学級数は25で児童数は700名を超え、市内でも比較的規模の大きい学校である。

本校では、学校教育目標に「考える子 思いやりのある子 たくましい子」を掲げ、「生きる力の育成」「地域と共に歩む学校」「潤いのある学校づくり」を柱に地域に根ざした教育活動を進めている。今年度から、草加市教育委員会の研究委嘱を受け、中学校1校、小学校2校、近隣の幼稚園や保育園と幼・保・小・中一貫教育の研究に取り組んでいる。

草加宿の面影の残る市内の中心部に位置し、学区内には一日の利用者数が8万人を超える草加駅、大規模なデパートやスーパーマーケット、商店や飲食店が軒を連ねる活気ある地域の中にある。また、地域の方々や保護者の方々は、学校の教育活動に非常に協力的であり、年2回の親子清掃やバザーには多くの方々が参加される。

「あいさつは一生のたからもの」を合言葉に、代表委員会の児童を中心とした挨拶運動が行われ、進んで挨拶ができる活気ある学校づくりを進めている。また、敷地内には、ふるさとの森(緑地)やじゃぶじゃぶ池(ビオトープ)が整備され、理科や生活科の学習はもとより、春と秋に行う全校自然観察に活用している。

## 2 活動のねらい

本校は、駅からも近く周囲には大規模なデパートや多くの商店や飲食店が建ち並んでいるため、不特定多数の人が行き来し、治安的にも注意が必要な地域と言える。また、ここ20～30年の間に関東でも大地震が起きる可能性が高いと言われている現状も踏まえ、児童の防犯や防災に対する意識を高め、自らの命や安全を自分で守る力を養うために本活動を設定した。そして、その活動の過程において友達と意見を出し合い課題を解決していくことで、将来、大人になったとき、生きて働く力となる汎用的能力を身に付けられるようにする。

## 3 活動の概要

### (1) 重点とした汎用的能力

- ・協調性  
双方の主張の調整を図り、調和をとることができる力
- ・プレゼン力  
自分の伝えたいことを他者に分かりやすく伝え、他者を納得させる力
- ・課題発見力  
現状を分析し、目的や課題を明らかにする力

(2) 教育課程上の位置付けや時間数

学年	教科等	単元・題材名等	時期・授業時間数
第5学年	総合的な学習の時間	地域に生きる	10月～3月 32時間

(3) 活動計画

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
2	導入	オリエンテーション 防犯や防災に関する地域の環境の問題点について	市で発行している防災ハザードマップを参考資料として提示する。		主体的な学び
1	企業等との連携	①ALSOKとの連携 ALSOK「あんしん教室」	仮想の町の地図を提示し、身の回りにおける危険箇所について考えさせる。	課題発見力 危険箇所を見つける	
1		②草加市役所との連携 危機管理課による出前授業	東日本大震災の映像を交えながら、地震への備えについて考えさせる。	課題発見力 自分の生活にかかわる課題	
2	課題	地震についての映像資料の視聴と課題の設定	映像資料をもとにして、地震のときに危険な場所について考えさせる。		対話的・協働的な学び
2	調べる	防災施設についての調査	インターネットを活用し、身の回りの防災施設について調べさせる。		
6	調べる	学区内の現地調査	地震時に危険な場所の定義を想起させ、危険箇所及び防災施設を見つけてデジタルカメラで記録させる。	協調性 現地調査を協力して行う	
2	対話	現地調査の結果に関する話し合い	危険箇所等の写真を見ながら、起こりうる危険について意見交換をさせる。	協調性 友達の意見から学ぶ	

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
14	まとめ・発表	パワーポイントを用いたまとめ、発表	まとめ作業の途中経過を交流させる。	プレゼン力 視覚的に捉えやすくするための工夫	深い学び・成長の実感
2	振り返り	地域の安全に関する考察	地域の一員として、自分ができることを考えさせる。		

#### 4 活動までの道のり

##### ① ALSOKとの連携

ALSOK(総合警備保障株式会社)のホームページを見て、「あんしん教室」の資料を確認した。そして、学校周辺にあるALSOK(総合警備保障株式会社)の営業所に連絡し、単元の指導計画や学習のねらい、「あんしん教室」を行う意図などを伝え、授業の内容や実施日について決定した。実施1ヶ月前には、担当者の方に来校していただき、単元全体の指導計画や授業の流れについて詳細な打合せを行った。

本単元の学習では、学区内における地震時の危険箇所等を見つけ、防災マップを作ることが主な活動となる。しかし、前述したように本校の学区は防犯上の危険箇所も多いという実態があること、また仮想の町の地図を用いて危険箇所を見つける活動が、防災マップ作りにおいても生かされるということで、ALSOKの「あんしん教室」を単元計画に入れることにした。

1時間の授業であったが、そこでの「危険箇所を見つける」「危険箇所について話し合い・発表する」という活動が、防災マップを作る活動における基礎となった。

##### ② 草加市役所との連携

本単元の内容や趣旨を説明し、出前授業の依頼をした。後日、電話で授業内容の詳細について打合せを行った。本単元では、地域の一員として地域の安全を守るという意識を高めることを、ねらいの一つとしている。出前授業では、「自



【グループでの話し合いの様子】



【全体への発表】



【危険への対処方法を教わる】

分の命を守ることと、もう一人の人を助けること」を目標にしてほしいという話があり、本単元のめあてに沿った授業内容であった。

## 5 活動上の工夫

○ 課題発見力を身に付けるために

ALSOKの「あんしん教室」では、まず、仮想の町の地図を見て危険だと感じる場所を児童一人一人が考えた。次に、グループで話し合い意見をまとめた。一人一人の児童が危険だと思う場所は異なっており、自分とは異なる視点で考えている友達の考えを聞くことによって多様な視点で考えることができた。そのことにより、多様な見方で課題を発見する力を育むことができた。

○ 協調性を身に付けるために

本単元の学習では、4回の実地調査を行った。その中で、実地調査の結果について振り返り、互いの考えを伝え合う時間を設定した。それにより、友達は自分と異なる見方で考えていることに気づき、友達の考えを聞くことで自らの考えが深まることを感じられるようにした。また、グループとしての考えを集約する過程において、互いの主張を調整する力を育めるよう配慮した。



【現地調査の様子】

○ プレゼン力を身に付けるために

総合的な学習の時間においては、前単元の環境に関する学習でもパワーポイントを使用している。キーワードを絞り、文字数を少なくすることや、伝えたいことを視覚的に捉えやすいように表現することなどを指導し、分かりやすく伝えることを意識させた。

## 6 成果と課題

(1) 成果

○ 単元の導入段階において、実際に防犯や防災の最前線で活躍している方々から指導していただくことで、意欲的に単元の学習に取り組むことができた。

(2) 課題

○ 今年度は防災マップのみの作成としたが、防犯マップと防災マップのどちらかを児童が選んで作成できるようにした方がより学習内容の理解が深まると感じた。

## 7 NEXT PLAN

専門家の方々との連携授業を行うことにより、児童は意欲的に学習に取り組むことができた。また、現地調査においてもスムーズに危険箇所等を見つけることができた。しかし、専門家の方との連携授業では一方的に教わるのが中心であった。そこで、学習を通じて獲得した自分の考えを、専門家の方に伝えるような機会を設けることで、より理解を深めさせたい。さらに、学習の中で生じた新たな疑問を専門家の方に尋ねて学習を進めるなど、探求の過程が繰り返される活動にすることで、主体性などの汎用的能力も育んでいきたい。

# 生徒が主体的に活動する、企業との連携

－「異文化交流」におけるゲストティーチャーとの双方向的な学習活動－  
新座市立第二中学校

## 1 学校の概要、地域の特徴

本校は、1学年8学級、2学年8学級、3学年9学級、特別支援学級2学級で、生徒数が939名、職員数が60名以上の県内でも屈指の大規模校である。都心へ20分程度でアクセスできる二つの路線と駅が学区にあり、いわゆる「埼玉都民」の保護者が多い。教育への関心が非常に高く、学校への理解も十分にある。1年生では5割の生徒が通塾し、学年が上がるごとにその割合は高くなり、3年生では9割以上になる。学習にも熱心に取り組み、授業崩壊と呼ばれるような状況はほとんどない。埼玉県学習状況調査の平均点は、3年連続で全学年・全科目・全単元で県平均を上回っている。ここ5年間は生徒指導上の大きな課題はなく、学校生活に前向きに取り組んでいる生徒がほとんどである。生徒会による自治活動も活発で、生徒総会での提案が、新たな校則になることも珍しくない。不登校生徒は昨年度1.3%で、非行によるものは皆無である。毎月実施しているいじめアンケートでは「いじめている」「いじめられている」「いじめを見たことがある」の全てを合計しても学校全体で一桁が続き、対応も組織で素早く行うことができ、保護者も協力的である。

こうして本校は、家庭や地域の恵まれた学習資源を基盤に、生徒が落ち着いて意欲的に学校生活に取り組むことができている。学習における基礎・基本の定着がある程度できていることから、研究テーマを【思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業改善の研究】（平成27・28・29年度新座市教育委員会委嘱）として、アクティブ・ラーニングに取り組み、新しい時代に求められる「汎用的能力」の向上を目指している。

## 2 活動のねらい

1学年の1学期の総合的な学習の時間の探究活動として、日本に滞在している外国からの留学生を教室に招く「異文化交流」を導入して3年目になる。留学生の依頼・選定については、1年目は立教大学・国際交流センターと連携し、2年目・3年目は公益財団法人・国際理解支援協会と連携し、「〈留学生が先生！〉教育プログラム」を利用した。

この時期に「異文化交流」を設定しているのは「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協働的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」という総合的な学習の時間の目標を、生徒と教師で再確認するための役割も担っている。

## 3 活動の概要

(1) 重点とした汎用的能力

**社会的資質** 段取り力・協働する力

**個人的資質** 主体性・プレゼン力



(2) 教育課程上の位置付けや時間数

学年	教科等	探究活動	時期	授業時間数
第1学年	総合的な学習の時間	異文化交流	1学期6～7月	9時間

(3) 活動計画

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
1	事前指導	○オリエンテーションとして、学習活動の概要を説明する。	教師が異文化交流の経験を語って関心・意欲を喚起する。		主体的な学び
3		○学級を4名ずつ9つの班に分け、担当の留学生の出身国について資料を収集し、違うテーマ（歴史・気候・服装・食事など）で模造紙にまとめ、発表する。	「自分の表現でまとめる」ことを重視し、文章や図版などを貼り付けることを禁止する。	プレゼンカ人を惹きつける発表	
2		○交流会の準備をする。9つの班で役割分担する。 ①留学生の出身国発表班 ②司会班 ③はじめと終わりのあいさつ班 ④埼玉県・学校紹介班 ⑤質問班 ⑥日本の文化の紹介班 A ⑦日本の文化の紹介班 B ⑧教室装飾班 ⑨おみやげ制作班	一人一役となるよう、班内の分担にも留意する。 生徒はもてなす側であることを強く意識させる。 「留学生はなぜ中学校に来てくれるのか」を考えさせ、ふさわしい交流会を準備するよう指導する。	主体性 留学生をもてなす 段取り力 時間と手順を考えて準備する 協働する力 同じ目的のもと一つの作品を完成させる	
2	○朝の会の前に、歓迎の気持ちが伝わるような教室装飾を行う。（下写真）	事前の打合せを入念にした上で、教師は支援に徹する。	プレゼンカ 協働する力		



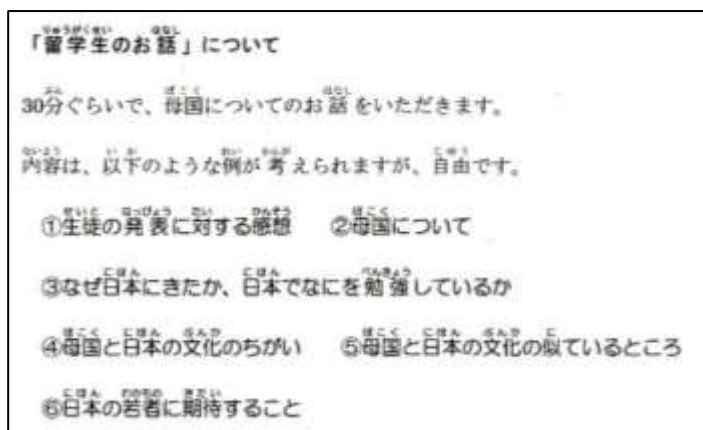
【装飾の一例。留学生の出身国の文化に関するものなど】

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
	<b>企業等との連携</b>	<p>○司会班が留学生を迎えに行き、教室を案内する。</p> <p>○あいさつ班がはじめのあいさつをする。</p> <p>○埼玉県・学校紹介班が新座二中を紹介する。(右写真)</p> <p>○日本の文化紹介班が、実演を交えながら、日本の文化を紹介する。(下・右写真)</p> <p>○留学生の出身国発表班が留学生の前で発表する。</p> <p>○留学生が自分の国について発表する。(下・右写真)</p> <p>○質問班が用意している質問をする。</p> <p>○あいさつ班が終わりのあいさつをする。</p>	<p>教師や指導者からの指導・支援</p> <p>【埼玉県とその「ゆるキャラ」を紹介】</p> <p>【剣道の紹介では、立ち合いを披露】</p> <p>【和食の紹介のため味噌汁の「出汁」の取り方を実演】</p> <p>【自国の中学校の給食について紹介するスリランカからの留学生】</p> <p>【「組紐」を体験させてくれた中国からの留学生】</p>	<p>重点とした能力</p> <p>対話的・協働的な学び</p> <p>深い学び、成長の実感</p>	<p>過程</p> <p>深い学び、成長の実感</p>
1	<b>事後指導</b>	<p>○留学生にお礼の手紙を書く。</p>	<p>使用する語句やふりがななど、感謝の気持ちが伝わる表現の工夫を支援する。</p>	<p>主体性 感謝はどう表現すれば伝わるかを考える</p>	<p>深い学び、成長の実感</p>

#### 4 活動までの道のり

立教大学・国際センターに連絡、校長名の文書で依頼を行う。9名の留学生の選定は「日本語で母国紹介ができること」「可能であれば、アジア州・ヨーロッパ州・アフリカ州・北アメリカ州・南アメリカ州・オセアニア州それぞれから1名以上」というお願いをして、原則センター

へ一任し、大学の掲示板を通じて募集をかけていただく。来校する留学生（スリランカ・デンマーク・台湾・イギリス各1名、中国2名、韓国2名）が確定したところで、上記のような資料で留学生本人と打合せを行う。



#### 5 活動上の工夫

一つのクラスが2時間続きで1名の留学生と交流する形式をとることで、十分な時間を確保し、留学生の講演会ではなく、生徒の主体性を生かした双方向的な学習活動を成立させた。留学生の母国紹介は30分程度で依頼し、その他の時間は生徒の日本紹介などの活動と、留学生との交流を重視した、いわゆるアクティブ・ラーニングを取り入れた異文化交流である。このような形式にした理由は、留学生の母国紹介を聞くだけでは、汎用的能力を十分に身に付けられないだろうと考えたためである。

#### 6 成果と課題

##### (1) 成果

生徒が「留学生はなぜ中学校に来てくれるのか」という教師の投げかけから「この交流会に何を求めているのか」と自ら課題を見つけ、教科横断的に自ら学び、総合的に自ら考え、判断し「どんな交流会を企画・運営すれば、留学生をもてなすことができるか」という問題に対して、よりよく解決しようとする生徒の主体的な活動が成立していた。観察評価や発表の内容評価、お礼の手紙の評価においても、重点とした汎用的能力が向上するきっかけとなる授業であったという手応えがあった。

##### (2) 課題

生徒の活動は主体的であった一方で、九つの班に分担した学習活動については、アクティブ・ラーニングの視点から見直し「深い学び」が成立していたか検証したい。また、準備時間の確保が困難であり、専門性の異なる分野の指導（例えば社会科教諭が英語の挨拶を指導すること）に携わる担任等学年職員の負担も大きかった。

#### 7 NEXT PLAN

上記のような、準備時間の確保と専門性を生かした指導という課題については、カリキュラム・マネジメントによる解決に努めたい。例えば、社会科（外国の資料収集と読み取り）や外国語科（現地語の挨拶）、国語科（分かりやすく惹きつける発表方法）、美術科（装飾や発表資料のデザイン）などとの教科横断的な取組を年間計画に位置付けることで、教科の授業を準備と指導により時間を充てることができる。

# 学ぶ意欲を高め、主体的に活動する児童の育成を目指して

—科学体験を通して児童の学びを高める取組—

毛呂山町立川角小学校

## 1 学校の概要、地域の特徴

本校は、埼玉県のほぼ中央に位置し、明治6年に開校した。143年の歴史と伝統があり、地域の方々も教育活動に関心が高く、いつも温かく見守ってくれている学校である。現在、児童数408名、学級数15学級の学校である。

教育目標を「豊かな心・たくましい体・考える力」とし、目指す学校像は「楽しい学校・いじめのない学校・地域に誇れる学校」である。

豊かな自然環境の中で育った児童は、大変素直であり、伸び伸びと元気に学校生活を送っている。

## 2 活動のねらい

子供たちの学力として現在、主要教科に加えて理科の学習意欲や理解の定着が低いことが大きな課題となっている。本来、理科の学習とは身近な自然や科学において、驚きと発見の中から問題解決能力や科学的な思考を養うことが目的となっている。授業の中で観察や実験を通じて、感動体験や好奇心を助長するような場面を設けることが、子供たちの意欲に直接つながるものと考えている。

そこで今回、関東電気保安協会と連携し、授業では取り扱わない実験や体験を通して、科学への興味や意欲を高め、進んで観察や実験に取り組む態度を育てていく。

## 3 活動の概要

### (1) 重点とした汎用的能力

- ・課題発見力

問題状況の中から課題を発見する力

- ・協働する力

意見の違いや立場の違いを理解した上で、他者と協力しながら、共通の目標や課題の達成を目指し活動できる力




- ・プレゼン力


自分の伝えたいことを他者に分かりやすく伝え、他者を納得させる力

### (2) 教育課程上の位置付けや時間数

学年	教科等	単元・題材名	時期・授業時間数
第4学年	理科	電気のはたらき	6月・10月 18時間
第5学年	理科	電流がうみ出す力	11月 11時間

(3) 活動計画

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	課程
8	<b>導入</b>	理科授業 4年「電気のはたらき」 5年「電気とわたしたちの暮らし」			<b>主体的な学び</b>
2	<b>企業等との連携</b>	①関東電気保安協会との連携 電気の仕組みや危険性などを学ぶ。また電気を使った実験を行う。 	映像をもとに電気の知識を深める。個々で実験を行い、体験を通して科学への興味を高める。 	課題発見力 電気のしくみについて	
		アンケート・お礼の手紙			
		②毛呂山サイエンスショー（夏休み任意参加） 問題解決能力や科学的思考を養う。 	授業では取り扱わない科学実験を通して、興味・関心を高める。 	課題発見力 音のしくみについて	
1	<b>課題</b>	「川小サイエンスショー」を開催しよう。			
2	<b>調べる</b>	3、4人のグループで科学実験を行う計画や内容を考える。	科学的な根拠も明らかにすることで、知識や理解も深める。		
2	<b>対話</b>	実験材料や役割について話し合う。 		協働する力 グループでの協力	

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	課程
2	まとめ・発表	「川小サイエンスショー」  	実験の仕組みも分かりやすく説明し、科学的な思考も深める。 	プレゼンカ 実験の分かりやすい説明	深い学び・成長の実感
1	振り返り	サイエンスショーの感想を書く。	実験内容・発表について振り返る。		

#### 4 活動までの道のり

関東電気保安協会との連携

第4、5学年の理科で電気を扱う単元の発展として、炭電池とクリップモーターを作成する実験を考えた。単元の発展でもあるので、事前連絡を取り、各学年の単元計画と本時の授業展開の打合せを行い実践した。事前の打合せでは、既習の学習内容の確認や実験器具の準備、実験の行い方について共通理解を図った。

教師主導で授業を展開し、実験部分では役割を明確にしながら、補助的な立場で協力をお願いした。

#### 5 活動上の工夫

○課題発見力を身に付けさせるために

理科の学習において子供たちは実験や観察が楽しいと感じている児童は多い。理科への興味・関心を植え付ける上でも、驚きや発見、疑問を大切に扱っていかねばならない。様々な身近な教材や知識を活用した実験を通して、「何故だろう」「こうしたらどうなるのだろうか」という科学的な思考を高め、自らの課題を見出していくようにした。

○協働する力を身に付けさせるために

今回、「川小サイエンスショー」としてグループで一つ実験を考えさせ、紹介することとした。グループで資料作りや実験材料の準備、更に工夫を加えた内容を積極



【炭電池をつくっている子供たち】

的に考えていくようにすることで、グループ内の対話を深めることとした。

○プレゼン力を高めるために

「川小サイエンスショー」を休み時間に開催し、他の児童にも見てもらうように設定した。発表形態として、①実験内容の紹介②実験③実験結果の仕組み④交流⑤感想という順で発表できるようにした。特に、実験結果の仕組みについては、難しい言葉ではなく、低学年でも分かるように配慮して発表するよう取り組ませた。



【交流で実験を体験している子供たち】

## 6 成果と課題

### (1) 成果

- 炭電池作りとクリップモーター作りについては、ほぼ100%の子供たちが楽しかったと回答している。また、電気に関する映像や電気ショート実験では電気の危険性についても触れ、様々な体験活動を通して、より深い知識の獲得につながった。
- 子供たちの振り返りでは、「実験を考えることが楽しかった」「またこれからも自分で取り組んでみたい」という感想が多かった。子供たちの科学への興味・関心が高まったといえる。
- グループで調べる段階では、企業との連携事業もあり、楽しい実験を考えようと積極的に対話している場面が多く見られた。実験道具を進んで準備したり、インターネットを活用し資料を調べたりするグループも多く見られた。

### (2) 課題

- 実験・演習においては、製作に重きが置かれてしまった部分があったので、どのような仕組みで電池やモーターができているのかを、十分に学習する時間を設定する必要がある。
- 授業の時間数について、今回予定していた理科の授業以外の時間を割かなければならなかった。今後、年間計画作成において更に綿密な計画を立て、年間計画に組み入れていく必要がある。
- 身近な材料で行える実験を考えさせてきたので、内容が類似するものや工夫に広がりがないものもあった。実験の中で火や電気、理科教具も活用してできる方法を考えていきたい。

## 7 NEXT PLAN

実験においては支援できる団体に協力を要請し、一緒に取り組んでいくことで実験内容の更なる工夫や安全性に留意することが可能になると考える。また、グループの発表において実験内容やプレゼン力を相互評価し、賞を与えていくような実践をすることで、より思考を凝らした取組になっていくと考える。最終的に、全校挙げて「川小サイエンスショー」に取り組みたい。

# 社会へ踏み出す第一歩

－職場体験活動を通して－

狭山市立山王中学校

## 1 学校の概要、地域の特徴

本校は、平成28年に開校40周年を迎え、1・2学年3学級、3学年4学級と特別支援学級3学級で、生徒数は367名在籍している中規模校である。学校教育目標は「未来を見つめ、自ら行動する生徒」を掲げ、生徒は「時を守り、場を清め、礼をつくす」ことを心得として、学校行事や部活動に積極的に取り組んでいる。本校の特色としては、合唱活動がとても盛んである。年間10回ほど披露する場面があり、全校合唱の指揮者と伴奏者、ソリストについてはオーディションを開催して決めている。昼休みにも輪番で合唱練習をしており、誇りを持って合唱活動に取り組んでいる。生徒は本校の特色について「合唱です」と自信を持って答えている。

また、PTAの挨拶運動や狭山市学校支援ボランティアセンター（SSVC）の学習支援等、PTAや地域との交流も盛んである。

## 2 活動のねらい

職場体験活動は、働くことの厳しさや素晴らしさ、社会のルールやマナーについて学び、この体験を基に自分を見つめ直し、新しい自分を発見するために行うものと考えられる。将来、大人になったときに自分はどういう生き方をしているのか、自分がなすべきことについて考えるきっかけとなる活動にしていきたい。

そのために、身近な地域に暮らす人々と触れ合うことを通して、新しい自分を発見する場としていきたい。また、実際に体を動かして「働く」という学習活動を体験し、自らの肌で感じた気づきや学んだ事柄を通して、将来の職業選択能力や職業観・勤労観の基礎を養うことをねらいとしている。

## 3 活動の概要

### (1) 重点とした汎用的能力

- ・働くことへの意欲

働くことの意義を理解し、将来の進路希望に基づいて当面の目標を立て、その達成に向けて行動する力

- ・協働する力

意見の違いや立場の違いを理解した上で、他者と協力しながら、共通の目標や課題の達成を目指し活動できる力

### (2) 教育課程上の位置付けや時間数

学年	教科等	単元・題材名等	時期・授業時間数
第2学年	総合	職場体験学習	5～7月頃 13時間
	学活		9～10月頃 7時間

※ 総合：総合的な学習の時間



(3) 活動計画

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
1	<b>導入</b>	○オリエンテーション	○職場体験の心構え・当日までの日程を説明し、意識付けを行う。		<b>主体的な学び</b>
1	<b>課題</b>	○働くことの意義	○職場体験の目標・ねらいを明確にし、生徒の意欲を高める。	働くことへの意欲	
2	<b>企業等との連携</b>	○社会保険労務士との連携 出前授業	○社会保険労務士の仕事について、生徒に理解させておく。 ○社会保険労務士と、事前に授業の内容・準備について打合せをして、生徒の実態に合ったものにする。	働くことへの意欲	
5	<b>対話・調べる</b>	○事業所の紹介・決定 ○スキル学習  ○スライド集会	○事業所の決定後、班ごとに電話のかけ方の練習、事前訪問時の自己紹介や質問をまとめさせる。  ○先輩の体験活動を事業所ごとにまとめ、興味・関心を高める。	協働する力	<b>対話的・協働的な学び</b>
3	<b>企業等との連携</b>	○事業所 事前訪問  ○事前集会	○仕事内容や諸注意を確認させる。  ○これまで学習してきたことを、もう一度想起させる。		
18		○職場体験（3日間）	○日々の活動内容を、しおりに記入させる。	働くことへの意欲	
1		○お礼の手紙	○感謝の気持ちを手紙にまとめさせる。		<b>深い学び・成長の実感</b>
6	<b>まとめ・発表</b>	○各自でまとめたことを持ちより、事業所ごとにまとめる。  ○クラス発表・学年発表（学校公開日）	○事業所の魅力や、中学生なりの工夫等が表現できるように支援する。  ○発表の仕方を指導する。	協働する力	
1	<b>振り返り</b>	○発表の振り返り	○発表を聞いた上で、その職業に関する魅力や感想を記入させる。		

## 4 活動までの道のり

### ① 社会保険労務士との連携

本校では、ここ数年職場体験学習が始まると社会保険労務士を招いて、お話を伺っている。授業の内容については、十分な打合せをして、生徒の実態に合った内容にしている。また、生徒には、事前に社会保険労務士の仕事を紹介し、理解させている。当日は、授業の冒頭10分は担任が社会保険労務士の話す内容に関連する話をした。社会保険労務士は各クラスに一人派遣され、それぞれのクラスに割り当てられている事業所を事前に伝えておいた。

社会保険労務士は、『働くときの基礎知識』（全国社会保険労務士会連合会）を生徒に配布し、このデータを使用しながら以下の授業を行った。

働く形態、働くことに関するルールや法律、事業所で必要とされる人とは進路や職業を選ぶときに役立つ知識、ブラック企業・ブラックバイト  
バイトテロ、若者の離職率の高さ

### ② 民間企業との連携

前年度に活動させていただいた事業所を中心に、生徒の多様な要望に応えられるよう幅広い分野の事業所と連絡を取り、33か所で活動した。

公共機関（博物館、公民館、消防署）、教育関係（幼稚園、保育所、小学校）  
医療・福祉（病院、社会福祉法人）、製造業（食品製造）  
サービス業（スーパー、コンビニ、飲食店、ガソリンスタンド等）

職場体験活動の充実と不安解消のため、事業所の活動内容を事前に調べる時間を確保し、不明な点を事前訪問で担当者と打合せをするようにした。

公民館では講座の見学や手伝い、消防署では訓練や普通救命講習の受講、幼稚園・保育所・小学校では授業の補助や児童との触れ合い、社会福祉施設では高齢者との触れ合いやシーツ交換、スーパーやコンビニでは品出しやレジ打ち等を行わせていただいた。

## 5 活動上の工夫

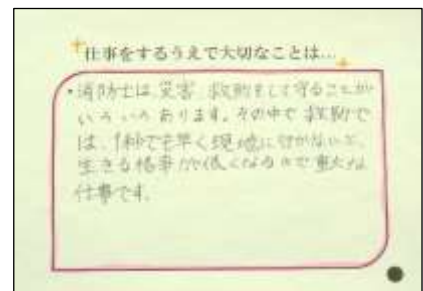
### ○ 働くことへの意欲を持たせるために

「働くことの意義」について意識付けた上で、社会保険労務士の出前授業を受講した。出前授業では、身近で具体的な様々な事例を提示してもらえるので、生徒は「働く」ことについてイメージしやすかった。

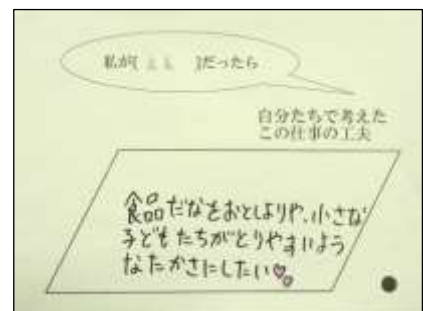
職場体験では、消費者目線で事業所の工夫点を探したり、課題を考えさせたりしながら参加させた。また、何をどのように改善するとより良い仕事内容になるのか意識させ、一つ以上の改善点を見つけることを目標とした。

### ○ 協働する力を身に付けさせるために

職場体験中は、生徒は個々で事業所の工夫点や改善点を探していた。体験後は、同じ事業所の仲間と意見を出し合い、それぞれの考えをグループ内でまとめた。その過程で相手の話を理解し、アイデア



【仕事をやるうえで、大切なことは】  
事業所：消防署



【自分たちで考えた、この仕事の工夫】  
事業所：農家

を膨らませるなど協働する力を身に付けることができた。

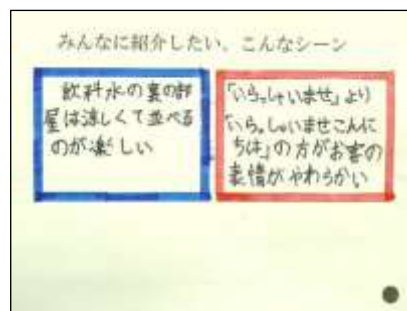
## 6 成果と課題

### (1) 成果

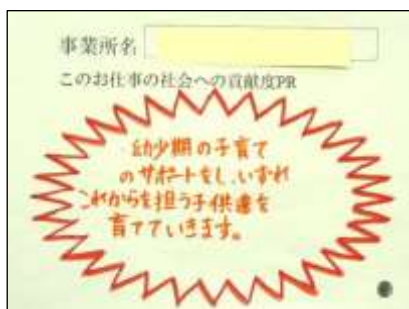
- 社会保険労務士は労働者の立場に立つ仕事なので、労働に関する諸問題を扱うには最適な人材だった。今回の内容は、社会科の公民的分野「社会権」「労働の意義と労働者の権利」「働きやすい職場を築くために」「社会保障の仕組み」で学ぶことなので、導入部として実体験できたことはよかった。
- 3日間であったが実際に働いたことは、有意義なことであった。生徒は、体験前と比べて表情が豊かになり、自信をつけて帰ってきた。
- 11項目の自己評価の結果は、平均9.3点だった。生徒は仕事への満足度が高かったことを示している。
- 「現在の事業所の工夫」を調べ、「自分が事業所で責任ある立場なら、どんな工夫ができるか」という課題があったので、目的意識を持って参加できた。
- 職場体験の経験から、次の進路学習に前向きに取り組むことができた。

### (2) 課題

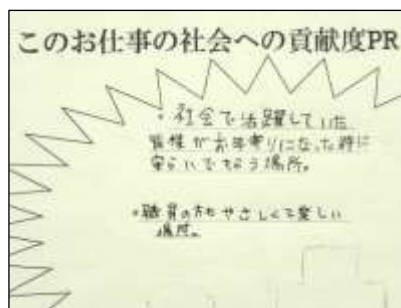
- 事業所のアンケートでは、働くことへの意識や意欲の差、挨拶や返事、行動力など、基本的な生活態度ができていない生徒がいたと指摘された。
- 報告書の項目について、職場体験前に生徒に提示しておく必要があった。
  - ・「みんなに紹介したい、こんなシーン」は、1班しか記入がなかった。
  - ・「自分たちで考えた、この仕事の工夫」や「このお仕事の社会への貢献度」については、生徒への働き掛けしだいで、もっと深い考察ができたと反省している。



【みんなに紹介したい、こんなシーン】  
事業所：コンビニ



【このお仕事の社会への貢献度PR】  
事業所：幼稚園



【このお仕事の社会への貢献度PR】  
事業所：社会福祉法人

## 7 NEXT PLAN

社会保険労務士の話は多岐に渡っていたので話題を絞り、時事ニュースや生徒の興味に応じて2～3のテーマで掘り下げるようにする。

次年度、下級生が職場体験をするときに発表する機会を設け、体験を振り返るとともに、現在の目標を確認する。

# 子供が関心を持って取り組む環境学習

－企業等との連携を生かして－

本庄市立旭小学校

## 1 学校の概要、地域の特色

本校は平成12年に開校100周年記念を祝い、地域とともに歩む歴史ある学校である。現在、15学級、児童数359名。児童は、明るく素直で元気があり、「あいさつと笑顔が日本一」の学校を目指している。

校区は赤城山をはじめ五州の山並みが美しい埼玉県北部の農村地帯にある。南端をJR高崎線が走り、北端を利根川が流れている。校区の中央を通る国道17号より南側は、区画整理により宅地化が進み、児童の約8割はこの地域から通学している。

本校の保護者や地域の方は、教育に対して大変関心が高く、生活科や総合的な学習の時間等の指導をはじめ、読み聞かせや防犯パトロールなど、積極的に御協力・御支援をいただいている。また、市内にある本庄早稲田国際リサーチパークには、5年生の総合的な学習の時間における環境学習の御指導をいただいている。

## 2 活動のねらい

地球の温暖化や森林の減少、生態系の変化など環境問題について考え、自分たちの生活とのかかわりや生活の仕方を振り返ったり、身近な環境への意識を高めたりする。また、日々の生活を見つめて、環境について身近なものとして関心を持ち、自ら課題を見つけて調べ、友達と話し合い、伝え合いながら、まとめていく活動を通して、自分の考えを深めていくことをねらいとしている。

## 3 活動の概要

### (1) 重点とした汎用的能力

#### ・課題発見力

問題状況の中から課題を発見する力

#### ・コミュニケーション力

多様な集団・組織の中で、他者と円滑にコミュニケーションをとり、豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく力


#### ・プレゼン力

相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝える力

### (2) 教育課程上の位置付けや時間数

学年	教科等	単元・題材名等	時期・授業時間数
第5学年	総合的な学習の時間	旭環境フォーラム	2・3学期 35時間

(3) 活動計画

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程	
1	<b>導入</b>	オリエンテーション	環境問題について知っていることを発表させ、意識付けを行う。		<b>主体的な学び</b>	
2	<b>企業等との連携</b>	① 埼玉県立自然の博物館との連携 身近な川の水質や県のような環境問題について知る。	実験やクイズ形式での活動を取り入れて、興味・関心を高める。	課題発見力 川の環境について		
1		お礼の手紙	感謝の気持ちを書く。			
2		② 富士通株式会社との連携	タブレットを使用し、自分の考えを映し出しながら、互いの考えを共有する。	課題発見力 地球環境について		
1		お礼の手紙	感謝の気持ちを書く。			
1	<b>課題</b>	課題の決定	子供たちの興味にそったグループをつくる。			<b>対話的・協働的な学び</b>
6	<b>調べる</b>	各自、テーマ（課題）ごとに調べ学習	市立図書館などを利用し、環境に関する本や図鑑を教室に常設しておく。			
2	<b>対話</b>	環境学習会に向けての話し合い	新たな疑問や質問をグループごとにまとめる。	コミュニケーション力		
2	<b>企業等との連携</b>	③ 本庄早稲田国際リサーチパークとの連携 旭環境学習会	具体物・掲示物等を用意していただき、分かりやすく説明してもらう。			
2		振り返り、各自の発表	ワークシートに学習したことをまとめ、各自で発表する。	プレゼン力 学んだことを分かりやすく		
1		お礼の手紙	感謝の気持ちを書く。			
11	<b>まとめ・発表</b>	発表会に向けて、グループごとにまとめる  旭環境学習会（環境フォーラム）発表会	どのようにまとめるか話し合い、順序立ててまとめる。 発表原稿をもとに、分かりやすく発表する。		<b>深い学び・成長の実感</b>	
2	<b>振り返り</b>	環境学習の振り返り	ワークシートに学習したことをまとめ、自分たちでできる環境への取組を考える。			

## 4 活動までの道のり

### ① 埼玉県立自然の博物館との連携

川の環境について「埼玉県立自然の博物館」より講師を招き、川の汚れや生物について学習した。

埼玉県にある川の数や川の汚れと住んでいる生き物の関係をクイズに答えながら学んだ。また、実際に川に住んでいる生物の観察や川の水や水道水、洗剤水・醤油水などの水の汚れを調べるなど、興味がわく工夫をしていただき、関心が高まった。



### ② 富士通株式会社との連携

電話で事前申し込みを行い、メールや電話にて学習内容を相談し、出前授業「地球1個分で暮らすために」を実践した。

当日は、森林の減少に伴う動物の減少や砂漠化、温暖化による地球環境の変化についてなどの話を聞きながら、タブレットを使って、クイズの答えや環境問題に対する自分の答えをプロジェクターで映し出し、みんなで考えを共有するなど、楽しく授業を行った。今の生活を続けていくためには、地球が2個分必要であることを聞き、環境問題に対する課題意識を持たせることができた。



### ③ 本庄早稲田国際リサーチパークとの連携

夏休みに本庄早稲田国際リサーチパークに連絡し、環境学習会について打合せを行った。

2学期が始まり子供たちが興味を持ったテーマ（地球温暖化、生態系の変化、森林の減少・砂漠化、放射性物質、水の汚れ、ゴミ問題など）を伝え、講師の先生を検討していただいた。学習会の2週間前に子供たちからの質問をまとめ、連絡し、当日は質問に対する答えや、詳しい話を具体物やスライドなどで説明してもらい、知識や理解を深めることができた。



## 5 活動上の工夫

### ○ 課題発見力を身に付けさせるために

総合的な学習の時間で環境学習を行うことを伝え、どんな環境問題を知っているか、自由に発表させる。様々な環境問題があることを知ることで、学習への関心と見通しを持たせ、課題を決める前の事前学習として、「埼玉県立自然の博物館」「富士通株式会社」との連携を図り、地球に起きている環境問題から自分が興味・関心を持った学習テーマ（課題）を決めさせる。

### ○ コミュニケーション力を身に付けさせるために

環境学習会の前に、グループごとに自分たちが調べたことを持ち寄り、調べて分かったこと・気付いたことなどを話し合わせる。そして、新たに浮かんだ

疑問や詳しく知りたい内容をグループごとにまとめる活動を通じて、コミュニケーション力を育てる。

○ プレゼン力を身に付けさせるために

調べ学習や環境学習会で学んだことをワークシートにまとめ、各自で発表させる。「分かったこと・感じたこと・自分の考え」などを区別しながら要点をまとめ、クラス内で発表し、相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝える力を身に付けさせる。

## 6 成果と課題

### (1) 成果

- 導入段階で「埼玉県立自然の博物館」や「富士通株式会社」などの外部の指導者から地球環境や身の回りの自然で起こっている問題を聞くことで、より詳しい内容を知ることができ、学習への関心が高まり、自分の調べたい課題を決めるのに有効であった。
- 「本庄早稲田国際リサーチパーク」との連携では、子供たちが詳しく知りたいことや疑問に感じていることを話し合うことにより、学習が双方向になることの良さに気付き、互いの意見を大切にすることができた。
- 環境学習会の後に、一人一人が調べてきたことのまとめとして個人発表（中間）を設けた。そうすることで、各自が要点をまとめたり、相手にわかりやすく伝える工夫を考えたりすることができた。

### (2) 課題

- 「埼玉県立自然の博物館」や「富士通株式会社」と導入の段階で連携した後、環境学習会を行うことができた。来年度の時期や段階について、早期に検討し、計画を立てることが課題である。
- 調べている内容が、地球環境から身近なものまでと広く、多く情報の中から必要なものを選択する力を育てることも大切である。
- 地球環境全体から身近な環境問題へという学習内容の順序を工夫するなど、子供たちに身近な問題として捉えさせるようにする。

## 7 NEXT PLAN

自分たちと環境との関わりを強く意識して学べるよう、「富士通株式会社」による地球環境学習会から始め、「埼玉県立自然の博物館」による身近な環境学習を経て、「本庄早稲田国際リサーチパーク」と連携した環境学習会を行うなど学習過程を工夫する。

# “もしも”の力を育む実技講習

— 専門的な知識を有する団体との連携を通して —

秩父市立影森中学校

## 1 学校の概要、地域の特徴

秩父地域にある本校は、卒業式等に歌われている「旅立ちの日に」の発祥校であり、その伝統と誇りを今に残し、全校生徒238名の主体的な学習活動や行事活動を行っている学校である。また、生徒による学習活動が活発で、アクティブ・ラーニングの授業スタイルを多くの教科で実践し、成果も残している。学校行事においても、生徒の主体的な活動が随所に見られ、生徒の手で創り上げる取り組みが伝統となっている。

本校は非常に穏やかな環境の中で、教育活動の実践を図っている。PTAや後援会の組織も充実しており、地域の協力も得やすい。特に校外教育の視点から考えると、2年生の職業体験の際には、学区の企業や商業施設はもちろん、秩父市全体として協力を受けられる環境が整っており、地域における生徒の学びの場が提供されるなど、学校に対して手厚い支援をいただいている。

## 2 活動のねらい

本校では、万が一の事態に備え、適切な方法と技術で応急処置が行えることを目的に救急救命講習を行っている。特に自然災害が多く起こっている昨今、知識としてだけでなく、実践を伴った体験的な学習によって主体的な学びを提供し、有事に備えることをねらいとし指導計画を立てている。それに伴い、地域の病院の看護師や消防署員に依頼し、校内の保健体育科の教員とTTを組んだ授業形態をとることで、専門的で具体的な指導を生徒に提供するとともに、主体的な学びをサポートし汎用的能力の育成を目指している。

## 3 活動の概要

### (1) 重点とした汎用的能力

#### 個人的資質

##### ○ 課題発見力

現状を分析し、目的や課題を明らかにする力

#### 社会的資質

##### ○ 連絡調整力

複数の人の間で、意思を互いに伝え調整する力

##### ○ 協働する力

意見の違いや立場の違いを理解した上で、他者と協力しながら、共通の目標や課題の達成を目指し活動できる力



(2) 教育課程上の位置付けや時間数

学年	教科等	単元・題材名等	時期・授業時間数
2年生	保健体育	保健編 3章 7・応急手当の意義と方法 心肺蘇生法の手順	6月初旬
		保健編 3章【実習】心肺蘇生法 直接圧迫止血法 包帯法（三角巾の使用含）	6月下旬 及び 11月中旬
1・2年生	総合	心肺蘇生法等、伝達講習会	3学期

※ 総合：総合的な学習の時間

(3) 活動計画

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
2	導入 課題	○保健学習 ・座学で傷害の発生原因や救急救命法に関する概論を学ぶ。 ・自然災害についても授業中にふれ、被災地での応急手当の現状や救命を左右する“72時間の壁”についても学習し、意識の向上をねらう。	○保健体育科教員が主導 ・養護教諭と連携し、簡単な実技指導を含めた指導を行う。 ・フローチャートなどワークシートを工夫し、応急手当の方法が明確になるような資料を作成する。	<b>課題発見力</b> ・応急手当の方法や心肺蘇生法についての知識を身に付けさせる。 ・「その時、私は…」と考え行動する、判断力や対応力を高める。 ・起こった事象に対し、何が求められているかを考えさせる。	主体的な学び
2	団体等との連携	○消防署員によるAED使用講習会の開催 ※心臓マッサージ法、人工呼吸法も含む  【指導を受ける生徒たち】	○6名程度のグループを作成し、指導や支援を入れやすい環境を整える。 ・少人数グループで役割を決め、ロールプレイを行わせるなど、生徒が対応しやすい形式を取る。	<b>連絡調整力</b> <b>協働する力</b> ・実技講習において、対応力や主体性を身に付ける。 ・グループ実習の中でコミュニケーションの大切さを学ぶ。	
1		お礼の手紙			
2		○医師、看護師による心肺蘇生法講習や三角巾を用いた包帯法や止血法実習	○小グループを組み、指導にあたる。 諸症状の発生原因別に講師から指導を受けられるよう、事前に打合せを実施し、指導環境を整える。	<b>課題発見力</b> ・AED講習会後の実習となるので、対応力とともに発展、深化をねらう。	

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
	団体等との連携	 【講習会の様子】	※諸症状：捻挫、骨折、挫創や裂傷などの傷害及び熱中症、脱水症状など	・周囲とコミュニケーションを取りながら、状況に合わせて段取りを調整していく力も向上させる。 ・身近な傷病への対応になるので主体的な学びを意識し取り組ませる。	対話的・協働的な学び
1		お礼の手紙			
2	まとめ・発表	○伝達講習会の実施 2年生から1年生へ、実技講習会で得た知識や技術を伝達する。	○生活班の中で役割を決め、スムーズに伝達できるよう準備させる。 ○ロールプレイ活動を通して、現場を意識した講習会にする。	○自分たちで進めることにより、主体性の向上をねらう。 ○段取り能力や表現力、プレゼン能力の向上を図る。	深い学び・成長の実感
1	振り返り	○実技講習会、伝達講習会を通した振り返りをする。	○来年度にもつながる活動となるよう、具体的な内容を示し振り返りをさせる。 *ワークシート活用	○汎用的な力を意識させ、様々な活動へとつなげられるようにする。	

#### 4 活動までの道のり

この連携は、以前より職業体験で消防署や市内の病院へ出向いていたのがきっかけとなったものである。そこで体験した生徒が「参考になった」「良い経験ができた」と話す様子が多く見られ、全生徒に体験させることはできないかというところから、実践へとつながった。特に病院との連携では、勤務されている保護者から学校に依頼を受け実現したという経緯がある。これは、東日本大震災の経験を踏まえ、非常災害時における緊急対応の必要性を地域から感じることでできる取組となっている。また同様に、震災以降、消防署でのAED講習もニーズが増え、署員の方からも「多くの方がAEDの使用について知識を有していた方が良い」との薦めにより、本講習が実現している。

#### 5 活動上の工夫点

通常の保健体育の授業では、座学での知識習得を目的とした授業となってしまうことが多い。しかし、この取組では、校内の専門家である養護教諭と連携し、TTで実習を伴った授業を行った。

また、生徒たちが講習を受ける前段階で、全教員が校内研修の時間を使って事前講習を受け、知識を有することができるようにしている。そうすることで、教員と生徒相互が有事の際に協力できる環境を整えた。

しかし、こういった身になる実習も年に1回の取組となると忘れてしまうことが多く、汎用的能力の育成は望めない。そこで、学期に1回というペースで講師を変えながら実習を行うことで、確かな知識として活用できるように計画を立て実施した。特に、3学期に実施している伝達講習では、生徒自らが講師となって実技指導を行い、知識や技能を活用につなげた実践となり、教えることによって学ぶというスタイルの講習会となっている。また、行事とは違った形での異学年交流も図られ、学校自体に活気が生まれる取組となっている。

## 6 成果と課題

### (1) 成果

- 講義だけでなく、実技講習を実施できたことは、様々な場面において役に立つ取組となった。特に、学期に1回のペースで計画できたので、実践と振り返りが連続した活動としてできたことは良かった。
- 部活動で起こりやすい傷害や日常生活でかかりうる疾病に関する予防方法や応急手当の講義をしてくださったので、身近な課題の解決を生徒自身で持てたように感じた。
- 行事以外で異学年交流が図られたことは、2年生にとっては先輩としての自覚を促し、1年生にとっては、次年度に向けた意欲の向上につながる意義深い活動となった。また、講習会形式のワークショップは、教え合い活動を発展させたアクティブ・ラーニングになると考えた。

### (2) 課題

- 依頼団体との打合せが不十分だったため、ねらいが不明確となってしまった場面があり、教わるべき内容が十分伝わっていない生徒も見られ、支援が必要な場面があった。
- 使用する器具には限りがあり、グルーピングを工夫しても活動時間の短い生徒や、自分の活動が終わってしまい手持ちぶさたな生徒が出てしまった。そういったときのワークシートや別の実習案を考え、準備しておくべきだった。
- 事後アンケートを実施した際、やはり「実際の場面に直面したときの不安」を抱く生徒が多かった。難しい問題であるが、緊急を要する場面でも落ち着いて行動できる準備として、実施回数を増やす検討も必要だと感じた。

## 7 NEXT PLAN

今回は消防署員の方々、市内の病院に勤務されている医師や看護師の方々に協力いただき実習を中心とした取組を展開した。今後は、実際の場面で使えることが大きなテーマとなる。

さらに、危険予測などの予防の手立てを講じてみることも考えられる。例えば、交通安全教室での事故再現（スケアードストレート）を実施して、交通事故に対する意識を高めたりするのも効果的だと考える。また、心肺蘇生のみの実践だけでなく、看護師の方には傷病における応急手当を具体的に指導していただけるような形を取れば、より連携が図られた取組となるのではないかと考える。

# 心と体のバリアフリー

— 社会福祉協議会と学校との協働学習を目指して —

加須市立大利根東小学校

## 1 学校の概要、地域の特徴

本校は、加須市の東端に位置し、利根川を背に久喜市に隣接している。また、本校の学区域である大利根地域は、作曲家であり音楽教育家でもある<sup>しもおさかんいち</sup>下總皖一先生の故郷ということもあり、「童謡のふる里おおとね」を宣言し、市の諸施策に反映させている。学区は、米づくりを中心とした苺の栽培などの都市型近郊農業が盛んな農業地帯である大利根地域の中でも、JR宇都宮線や東武日光線の栗橋駅に近く宅地化が進んでいる旗井地区である。児童数は、昭和51年から増加してきたが、昭和57年の708名をピークに減少してきている。

埼玉県学力・学習状況調査における、4年生から6年生までの国語と算数の平均正答率は、全ての学年で埼玉県の平均正答率と同程度または上回っている状況である。児童は学習に熱心に取り組み、落ち着いた態度で授業に臨んでいる。

保護者や地域の方は学校の教育活動に協力的で、学校の田んぼでの稲作やバザー（ふれあい東っ子祭り）、おじいさんやおばあさんの学習参観等の行事に積極的に関わってくださり、児童の成長に良い影響を与えていただいている。

## 2 活動のねらい

本校は、平成26年度から「道徳」を中心に研究に取り組んでいる。研究テーマは「ともにより良く生きる心ゆたかな児童を育てる道徳教育」である。「ともにより良く生きる」ためには、相手の立場に立って物事を考えたり、接したりしながら生活を送っていくことが大切である。研究テーマに迫るためには、障害のある人の思いと生き方にふれ、自分でできる援助を進んでしようとする態度を育てるとともに、生活をより良くしようとする姿勢を育てることをねらいとしている。

## 3 活動の概要

### (1) 重点とした汎用的能力

- ・課題発見力  
現状を分析し、目的や課題を明らかにする力
- ・コミュニケーション能力  
多様な集団・組織の中で、他者と円滑にコミュニケーションをとり、豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく力
- ・プレゼン力  
自分の伝えたいことを他者に分かりやすく伝え、他者を納得させる力

(2) 教育課程上の位置付けや時間数

学年	教科等	単元・題材名等	時期・授業時間数
第4学年	総合	心と体のバリアフリー	1・2学期 35時間

※総合：総合的な学習の時間

(3) 活動計画

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
1	<b>導入</b>	オリエンテーション ・学習の見通し ・お年寄りや障害者のためにできること	自分の体と比較して、共通点や相違点を知り、今後の学習に意欲を持たせる。		<b>主体的な学び、対話的・協働的な学び</b>
10	<b>企業等との連携</b>	○社会福祉協議会との連携 ・やさしささがし ・アイマスク体験 ・車いす・高齢者疑似体験 ・点字体験 ・手話体験	お年寄りや障害者の立場が考えられるように、全員に体験させる。	課題発見力 コミュニケーション力	
1		お礼の手紙			
1	<b>課題</b>	○体験を基にした課題設定 ・お年寄りとふれあう方法 ・障害者のための仕事 ・バリアフリーの施設設備	お年寄りや障害者に関わることのできる課題になるよう助言する。		<b>深い学び・成長の実感</b>
6	<b>調べる</b>	○課題解決方法の選択 ・インターネット ・本や資料 ・インタビュー			
2	<b>対話</b>	○調べたことの整理・まとめ ○学級内発表と意見交換 ○発表内容の修正			
10	<b>まとめ・発表</b>	○学校公開での発表 ・車いす体験 ・アイマスク体験 ・高齢者体験 ・手話体験 ・点字体験	お年寄りや障害者の立場が考えられるような体験活動を取り入れる。	プレゼンカ	
2	<b>振り返り</b>	○発表の感想	発表での自分の役割や工夫したことを書くようにする。		

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
1	まとめ	○お年寄りとのグランドゴルフ体験	グループをあらかじめ児童に知らせておく。		深い学び・成長の実感
1	振り返り	○グランドゴルフの感想	感想だけでなく、一緒にプレーしたお年寄りにお礼の手紙を書く。		

#### 4 活動までの道のり

年度初めに社会福祉協議会と連絡を取り、福祉体験学習を以下のとおりに計画した。昨年度までは3学期に実施したが、他校の実施時期と重なり連絡・調整が難しいことから1学期に実施することにした。

実施日	学習内容	時間	場所	指導者
6月9日	やさしささがし	2～3校時	教室	社会福祉協議会担当者
6月22日	アイマスク体験	2～3校時	体育館	社会福祉協議会担当者担任
6月28日	車いす体験・高齢者疑似体験	2～3校時	体育館	社会福祉協議会担当者担任
7月5日	手話体験	2～3校時	教室	社会福祉協議会担当者 視聴覚障害者協会の方
7月8日	点字体験	3～4校時	教室	社会福祉協議会担当者 点訳会の方

#### 5 活動上の工夫

○ 課題発見力を身に付けさせるために

導入時に「やさしささがし」と称して、お年寄りや障害者のために自分ができることを児童に考えさせることで、自分の課題の方向性を示す。

○ コミュニケーション力を身に付けさせるために

アイマスクをして物を触ったり文字を書いたりする。また、アイマスクをした人をガイドヘルプしたり、されたりする体験も行う。それによって、視覚障害者とのコミュニケーションの仕方を考える。

また、実際に聴覚障害者から、車のクラクションの音や電車の放送が聞こえないという話を聞くことで、他の人とコミュニケーションをとることが難しいことを知る。次に、聴覚障害者とコミュニケーションをとる手段として手話の体験を行う。



【目を閉じ耳をふさぐ子供】



【アイマスクをして給食着を着る子供】

- プレゼン力を身に付けさせるために

社会福祉協議会や視聴覚障害者協会の方の話を基に、ふれあい東っ子祭りでの来校者に学習した内容を分かりやすく発表したり、車いすや点字を実際に体験できるコーナーを設けたりする。



【車いす体験コーナー】

## 6 成果と課題

### (1) 成果

- 「やさしささがし」と称して、お年寄りや障害者に対し、自分ができることを考えさせたことで、「耳が聞こえない人に身振り手振りで教える」「目の見えない人に電車に乗るまでつきそう」など課題意識が高まり、進んで活動する意欲付けとなった。
- アイマスクを実際に付けることで、鍵盤ハーモニカを正確に弾くことができなかつたり、目の前が真っ暗で気持ちが不安になったりすることを感じ、視覚障害者の気持ちを理解する機会となった。また、ガイドヘルプの活動では、障害物があるところでは止まって声を掛けたり、階段の上り下りのタイミングを合わせたことが困難であることを体験できた。

車いす体験では、少しの段差でも体に振動が伝わることや車いすを押すときは乗っている人のことを考えて衝撃をなくす工夫をすることなどを学んだ。

以上のことから、児童は相手の立場に立って物事を考えたり手を差しのべたりすることの大切さを実感することができた。また、様々な感覚器官を使ってコミュニケーション力を高める必要性も感じられた。
- 学校公開の発表では、言葉を分かりやすい表現にしたり聞きやすい声の大きさを考えたりして発表できた。また、アイマスク体験が終わった児童に、視覚障害者の気持ちになれたか感想を聞くなど一方通行の体験で終わらない活動にすることができた。

### (2) 課題

- 総合的な学習の時間で「健康・福祉」に取り組んでいる学年が第4学年しかないことから、縦断的なカリキュラムを考える必要がある。また、中学校と連携してカリキュラム作りを検討する。
- 汎用的能力の育成を目指した学習指導計画を作成する。

## 7 NEXT PLAN

児童は社会福祉協議会担当者から話を聞き、お年寄りや障害者に対して何ができるか考えるなど、課題を持って取り組み、来校者への発表に結び付けることができた。さらに、お年寄りとのグランドゴルフの交流活動を行うこともできた。今後は、小学校で学んだ内容を、幼稚園や保育所に行って発表するなど活動範囲を広げ、校外に発信していくことも考えられる。また、特別支援学校や病院などと連携を図り、実際に介護の様子を見たり、体験したりする活動を取り入れるなどして、更に深い学びとしていきたい。

# 地域の職業人と連携した体験活動

— 「働く」ことの意義や大切さを学ぶ—

行田市立忍中学校

## 1 学校の概要、地域の特徴

本校は、現在生徒数367名、各学年4クラス、特別支援学級2クラスの計14クラスで、映画「のぼうの城」の舞台となった「忍城・二の丸跡」に立地し、再建された「御三階櫓」の目前で日々の教育活動を展開している。開校以来70年にわたるよき伝統を受け継ぎ、「自治・協同・勤勉」の校訓を大切にしながら、明日の日本を担う生徒一人一人の「夢」と「希望」と「生きぬく力」の育成に努めている。

行田市は、国宝「金錯銘鉄剣」が出土した稲荷山古墳をはじめ、日本最大の円墳である丸墓山古墳など、9基の大型古墳が群集する「埼玉古墳群」を有し、埼玉県名発祥の地である。また、市内には古代蓮などの42種類約12万株の蓮の花が咲く「古代蓮の里」、江戸時代の忍藩十万石の城下町を今に伝える「忍城址」のほか、足袋の産地を物語る「足袋蔵」が点在する風情ある街並みなど、豊かな自然と歴史が息づくまちである。

## 2 活動のねらい

- ・多様な職業、身近な人の職業の内容及び働くことについての考えを知り、実際に勤労体験をすることで、働くことの意義や大切さ、厳しさを学ばせる。
- ・自分の関心のある職業に就く人から話を聴き、職業に関する理解を深め、自分の今の生き方、将来の生き方について考えさせたり、夢や願いの実現に向けて行動したりする力を培う。
- ・職業や働くこと、働く人に関心を持ち、社会体験活動や働く人々とのコミュニケーションを通して、社会性や自立心を養い、たくましく豊かに生きる力を育む。同時に、進学・就職に対する目的意識を持たせる。

## 3 活動の概要

### (1) 重点とした汎用的能力

- ・働くことへの意欲  
職業や社会の一員として働くことに興味や関心を持ち、自立的な進路選択や将来設計をすることができる力
- ・コミュニケーション力  
多様な集団・組織の中で、他者と円滑にコミュニケーションを図り、豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく力
- ・プレゼン力  
相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝える力

### (2) 教育課程上の位置付けや時間数

学年	教科等	単元・題材名	時期・授業時数
1学年	総合	働く人から学ぶ会	2学期・10時間
2学年	総合	職場体験学習	2学期・33時間

※総合：総合的な学習の時間



(3) 活動計画

1 学年《働く人から学ぶ会》

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
1	<b>導入</b>	オリエンテーション			<b>主体的な学び</b>
2	<b>調べる</b>	職業について調べる ・なぜ働くのか ・職業調べ	グループ学習を入れ、興味・関心を高める。	働くことへの意欲	
2	<b>準備</b>	・話を聴きたい職業のアンケート ・分科会の決定			
2		・講師への質問の集約 ・「働く人から学ぶ会」の準備 ○分科会の役割分担 ○マナー指導	役割分担をし、自らの仕事に責任を持たせる。		
2	<b>企業等との連携</b>	①「働く人から学ぶ会」の開催 介護福祉士、保育士、消防士、薬剤師、和菓子職人、金融業、元スポーツ選手、野球監督の8名を招いての講話	聴く態度を正して、質問もできるように話を聴くように指導。	働くことへの意欲  コミュニケーション力	<b>対話的・協動的な学び</b>
1		お礼の手紙			

2 学年《職場体験学習》

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
1	<b>課題</b>	オリエンテーション ・希望職種のアンケート記入			<b>主体的な学び</b>
2	<b>準備</b>	・事業所の決定・役割分担 ・自己紹介カードの作成	役割分担をし、自らの仕事に責任を持たせる。		
2		・事前打合せ計画書の作成 ・打合せの電話予約	電話連絡のロールプレイを行う。	コミュニケーション力	
2		・事業所との打合せの事前指導 ・交通手段・マナーの確認	打合せのロールプレイを行う。	コミュニケーション力	
2	<b>対話</b>	打合せのための事業所訪問	体験に必要なことをしっかりと聴いてくれるよう指導。	コミュニケーション力	<b>対話的・協動的な学び</b>
1		事前指導			

時数	段階	主な活動や作業	教師や指導者からの指導・支援	重点とした能力	過程
18	企業等との連携	②職場体験学習 35の事業所で3日間の職業体験	遅刻などの失礼の無いようにし、3日間、積極的に取り組むよう指導。	働くことへの意欲	対話的・協働的な学び
2	まとめ・発表・振り返り	事後指導・新聞作成・お礼状	見る人・聴く人に分かりやすい新聞を作るよう指導。	プレゼンカ	深い学び・成長の実感
2		新聞の完成・発表練習	発表の際、読むだけでなく、寸劇・クイズなどを入れるなど工夫するよう指導。		
1		発表・アンケート記入			

#### 4 活動までの道のり

##### ① 働く人から学ぶ会

進路学習の一環として、1年生から「職業・働く」ことに興味や関心を持たせ、理解を深めさせるために、保護者や卒業生、地域社会の職業人などを講師に招いて、「働く人から学ぶ会」を実施した。介護福祉士、保育士、消防士、薬剤師、和菓子職人、金融業、元スポーツ選手、野球監督の計8名の講師を招いた。生徒には、事前にアンケートを取り、話を聴きたい職業を二つ選んでもらい、会を前半と後半の部に分けて二つの職業の講話を聴く形をとった。講話の後半には、生徒側から質問をする機会を設けた。

##### ② 職場体験学習

1年生の「働く人から学ぶ会」で学んだ知識を生かせるよう、病院、介護施設、幼稚園、スーパーマーケット、工務店、建具店、博物館、図書館、消防署、飲食店、テレビ局など「働く人から学ぶ会」で協力いただいた事業所を含む、全35事業所で職業体験を実施した。職場に行き働くだけでなく、事前の挨拶のためのアポイントメント取り、事前の挨拶文の作成、実施も生徒自身に行わせた。

#### 5 活動上の工夫

##### ○ 働くことへの意欲を持たせるために

「働く人から学ぶ会」では、講師の方に、その仕事を選んだ理由や経緯、その仕事のやり甲斐や苦労など、「働く」とはどういうことなのかを話していただいた。



【人形を作る生徒たち】



【TV局の撮影に同行する生徒たち】

職場体験学習では、朝7時半の朝礼から参加したり、実際に店頭で並ぶ商品を作

ったり、博物館の展示に関する企画会議に参加したり、プレゼンターになりテレビに出演したり、実習生という扱いではなく、職場の一人という扱いをしていただき、緊張感のある充実した3日間を送ることができた。

○ コミュニケーション力を身に付けさせるために

お世話になる立場であることをしっかりと認識をさせ、話し方、態度などの社会人としてのマナーの指導を行った。

「働く人から学ぶ会」では、一方的に話を聴くだけでなく、講話の中で気になったことを質問する機会を設け、講師と生徒でコミュニケーションをとれるようにした。



【野球監督の講話を聴く生徒たち】

「職場体験学習」では、事業所への事前の挨拶に行く前の電話連絡、事前の挨拶文の作成、実施を生徒自身に行わせた。また、事前指導として、様々なトラブルを見越した対処法を班で話し合わせ、対応できるようにした。

○ プレゼン力を身に付けさせるために

「職場体験学習」を終えて、各事業所の3日間の体験の様子を一枚の新聞にまとめさせた。その新聞を使い、各班3分程度の体験の報告会を行った。また、新聞の中身を読むだけでなく、接客の仕方で学んだお辞儀の仕方やお客さんとの対応の仕方を実演や分かりやすい図を掲示、体験中の一場面の再現、クイズ形式で聞いている人に言葉を投げかけるなど、発表の工夫をさせた。

## 6 成果と課題

### (1) 成果

事後アンケートの結果、仕事に積極的に取り組むことができたと答えた生徒が91%、仕事に心を込めて取り組むことができたと答えた生徒が94%いたことから意欲高く体験に臨めたことが分かった。体験中の生徒の様子も、日を増すごとに顔つきから自信を伺うことができ、事業所の方とのコミュニケーションも増えていた。体験終了後の報告会では、介護福祉施設で学んだ体操を実演してみたり、建具店で作業した内容をイラスト化して説明をしたりする姿が見られた。

### (2) 課題

「職場体験学習」では、「働く人から学ぶ会」で講話を聴いた職種とは違うところを選んだり、逆に講話で聴いた職種が体験先に無く選べなかったりするなど、2年間を通して「働く」ことについて考えさせることができなかった。アンケートの結果からも「働く」ということについて考えることができたと答えた生徒が81%であった。また、報告会については、同学年だけでなく、次年度体験する下級生に向けて行うなどの工夫をすれば、生徒もより力が入ったのではないかと考えた。

## 7 NEXT PLAN

「働く人から学ぶ会」と「職場体験学習」をより関連付けて、2年間を見越して計画を立てることで、生徒の働くことへの意欲や知識や関心を高めていきたい。また、職業の多様化が進む現代であるため、体験先の拡充も図っていきたい。

# 調査研究委員一覧

## 1 小・中学校教員

地区名	氏名	所属校名
さいたま市	伊藤 浩士	さいたま市立尾間木小学校
	小山 尚美	さいたま市立浦和中学校
南 部	子安 哲広	草加市立草加小学校
	橋本 一秋	新座市立第二中学校
西 部	二階堂 宏	毛呂山町立川角小学校
	新井 晃二	狭山市立山王中学校
北 部	金井 英光	本庄市立旭小学校
	笠越 拓哉	秩父市立影森中学校
東 部	安東 潤	加須市立大利根東小学校
	松岡 亮佑	行田市立忍中学校

## 2 講師

氏名	役職等名
大熊 雅士	NPO法人元気プログラム作成委員会副理事長 カウンセリング研修センター学舎ブレイブ室長

## 3 県教育局関係

平成27年度		平成28年度	
氏名	所属・職名	氏名	所属・職名
藤田 栄二	家庭地域連携課長	橋本 強	家庭地域連携課長
藤倉 陽子	家庭地域連携課・主 幹	藤倉 陽子	家庭地域連携課・主 幹
重岡 勝之	〃 ・指導主事	重岡 勝之	〃 ・指導主事
越後屋 智彦	〃 ・主 査	岩崎 洋祐	〃 ・主 査
田中 孝佳	〃 ・主 任	萩原 千尋	〃 ・主 事

編集・発行 一般社団法人 埼玉県校外教育協会

平成29年3月発行

(事務局) 埼玉県教育局市町村支援部家庭地域連携課内

[住所] 〒330-9301 さいたま市浦和区高砂3-15-1

[電話] 048-830-6976

[FAX] 048-830-4962

